

◇拠点形成概要

機 関 名	大阪大学		
拠点のプログラム名称	コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点		
中核となる専攻等名	人間科学研究科人間科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 小泉 潤二 教授	外 25 名	
<p>[拠点形成の目的]</p> <p>本グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」は、第一期の事業である21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」を継続再編して、「コンフリクトの人文科学」の研究教育拠点を形成するための第二期事業である。人類学を中心に、言語学、哲学、歴史学、芸術学、社会学などの基礎分野に加えて、国際協力学、人間開発学、教育学、人間の安全保障論等の実践分野が協働して研究教育拠点の構築を行う。</p> <p>社会的・文化的・民族的な対立と対抗関係の問題を分析し、その問題になんらかのかたちで対処することは、現代のグローバル世界における最も重要な課題の一つである。東西の冷戦構造が崩壊した1990年代以降、この課題は先鋭化すると同時に質的にも変化した。国家間、ブロック間、あるいは大イデオロギー間の比較的わかりやすい政治対立の図式から、きわめて多数の社会的・文化的・民族的集団が互いに複雑に絡まりあい、そこでは集団自身が急速に変化していくような流動的状况が生まれる中で、文化的、宗教的、社会的、経済的なレベルを含む様々な対立が様々に生起している。このように複雑化し流動化するコンフリクトの状況を理解するためには、その場に生きる人びとに焦点を合わせた現地調査に基づいた、綿密な、あるいは「厚い」現実理解が必須である。そのような対立や緊張を減じる方策があるとすれば、そうした理解を前提としなければならない。</p> <p>本拠点はこの課題に対し、人文社会科学の諸分野から貢献し、グローバルな次元におけるコンフリクトという問題に関する実践的研究を推進し、創造的に問題に取り組もうとする優秀な人材を育成することを目的とする。</p> <p>[拠点形成計画及び進捗状況の概要]</p> <p>大阪大学大学院人間科学研究科と文学研究科に構築した「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」は、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」を構成する6つの「モデル研究」を絞込み、トランスナショナリティ研究を中心として再編成したものである。本拠点では、特に民族や宗教や言語やイデオロギーなど、「価値」をめぐる生起するさまざまなコンフリクトについて、人類学ほか人文科学の諸分野の協働のもとに、現場に生きる人びとと自身に焦点を合わせた現地調査を中心とする研究を行っている。本拠点事業は当初の計画通りの進展が得られている。</p> <p>本拠点には8つのRF(リサーチフォーカス)、すなわち「言語の接触とコンフリクト」、「交錯するアートメディア」、「横断するポピュラーカルチャー」、「トランスナショナリティ」、「グローバリゼーション」、「人権と人道」、「人間の安全保障」、「コンフリクトと価値」が設置されている。COE運営会議によるプログラム全体の統括のもと、RFが相互に連携しながら研究教育を進めている。また、平成17年度に設置されたコミュニケーションデザイン・センター(CSCD)ならびに平成19年度に新設されたグローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)との学内連携を基盤に、世界の先端的研究者とのグローバルな研究協力のネットワークの有効な拡大をはかり、研究教育活動を活性化している。</p> <p>年間を通してプログラムの中核となっているのは、全RFの協働による連続的なセミナー(コンフリクトの人文科学セミナー)であり、平成21年3月までの1年半のうちに計30回開催されている。また、同時期に行われた国際シンポジウム・国際ワークショップは計10回にのぼる。なかでも、国際シンポジウム「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」(平成19年度)、国際シンポジウム「移動とアイデンティティ・コンフリクトと新たな地平」(平成20年度)では、先端的な研究者が世界各地から大阪大学に集い、数日間をわたって、コンフリクトに関する国際的、学際的な発表・討議を活発に行なった。大阪大学を拠点とする以上のような研究活動から得られた知見は、機関誌『コンフリクトの人文科学』にとりまとめられ、開示されている。</p> <p>若手研究者養成のための教育支援としては、大学院教育改革支援プログラムとの連携のもと、アカデミックライティング・セミナーなどの独自の支援を進めている。また、現地調査のための競争資金(大学院生調査研究助成制度、国際研究集会参加支援制度)を用意している。これは、既にひろく活用されており、本拠点の若手研究者が他大学で常勤の研究教育職を得るなど、その具体的成果が現れつつある。さらに、現在、国際協力機構(JICA)との連携協定締結(2007年2月)に基づく国際インターンシップ制度の導入に向けた整備を進めている。</p> <p>本拠点では、COE評価室を設けて自己評価を行うとともに、アドバイザー・ボードの助言を受けて研究教育事業の改善をはかる。</p>			

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、大学としての理念と本プログラムが整合的に関連付けられており、評価できる。

本拠点は、現代世界が直面する包括的、かつ重要なテーマである「コンフリクト」に意欲的に取り組んでおり、全体として、今後の成果が期待される。また、人文科学における各種学問分野(言語・芸術・宗教・民族・経済・政治など)を総動員して研究を推進している点に特徴があるが、このような個別領域を融合し、世界的教育研究拠点を形成するためには、今後、収束・収斂の必要性を意識し、整理をした上で、問題を提起することが期待される。

人材育成面、研究活動面においても、テーマの性質上、多様なアプローチになりやすいことから、世界的な拠点形成の観点からは、質的に拡散しないよう留意しつつ、計画を遂行していくことが肝要である。

これまでに行われたワークショップ・シンポジウム・学会発表は、質量ともに意欲的で高く評価できるが、これら以外の成果発表のあり方についても、世界的拠点形成の視野から新たな取り組みが期待される。